

【講演】

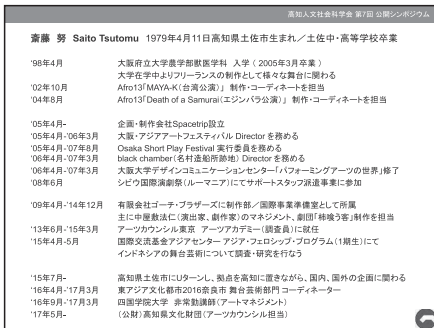
# アート・ポリティクス —地域社会におけるアート実践と文化行政の「ほどよい距離」とは?—

齋藤 努



スライド 1

知らないことがあったりするので、もし「今の言葉の意味わかりません」ということがあれば、手を挙げてもらったらその場で簡単に答えられることは答えるし、質問の内容によっては、ディスカッションした後改めて個人的にお話もできるんで。多分、用語が一つわからなくなるといきなりついていけなくなってしまうので、わからない事があれば



スライド 2

高知県文化財団の齋藤と申します。ここに書いているように、主査という肩書きで、アーツカウンシル担当という専門職員として、今、高知県文化財団で働いています。今日は、こんな天気の良い土曜日に、皆さんお越しいただきありがとうございます。

僕の場合は、現場の話ということで、ちょっとくだけた話ができればと思っています。用語的に専門職でないとかわからないことがあったりするので、もし「今の言葉の意味わかりません」ということがあれば、手を挙げてもらったらその場で簡単に答えられることは答えるし、質問の内容によっては、ディスカッションした後改めて個人的にお話もできるんで。多分、用語が一つわからなくなるといきなりついていけなくなってしまうので、わからない事があればすぐ手を挙げてください。その場で答え

ていきますので。最初にご自己紹介をしておきます。1979年4月11日、高知県土佐市の生まれなので、今、39歳で、来月40歳になります。土佐中・土佐高を出て、大学からは大阪に行きました。上段が大学時代の舞台芸術に関わった経歴になります。

大学に入ったときは、大阪府立大学の

農学部獣医学科という、まったく文化と関係ないところに行きまして、この頃は真剣に獣医さんになろうと思ってました。高校生の頃から海外放浪したいという夢があり、獣医の免許を取って、海外を転々としながら動物を治して生活していこうと思っていたんですけど、大学の先輩から「そんなことは無理」と言われました。

その時期に飲み会やメンバーが面白かった、という安易な理由で演劇部に入部したんですが、舞台のプロの方はヨーロッパツアーやアジアツアーを行なっている事を知り、こっちのほうが海外放浪の夢に近づけるかも？という気持ちになり、舞台芸術の世界に傾倒していきました。学生時代は役者もしていましたが、圧倒的に才能がなく、22歳で役者は区切りをつけ、その後はスタッフとして演劇に関わっていこうと思いました。

その後、プロデューサーという仕事を大学在学中から始め、大阪のアマチュア劇団と一緒に活動し、2002年10月に初めての海外公演を台湾にて行いました。その2年後の2004年8月には「Death of a Samurai」という作品にてスコットランドで開催されている「エジンバラ演劇祭」に参加し、エジンバラ公演をしました。この頃から僕は少しずつ獣医の道から逸れ、舞台芸術に舵を切っていくことになります。

2005年の4月に卒業はしましたが、あえなく国家試験に落ち、獣医の免許を取得できず、完全に舞台プロデューサーの道に舵を切りました。

中段は大阪にいた頃の経歴になります。大学は卒業したけど獣医免許もないので、いきなり自分で任意団体「企画・制作会社Spacetrip」を名乗り、その代表として、ここに書いてある大阪・アジアアートフェスティバルのディレクターをしたり、Osaka Short Play Festivalの実行委員とか、名村造船所跡地にあるblack chamberというホールでディレクターをしたり、舞台プロデューサーの経験値を上げていきました。

そして中段下部、ここから東京に移るんですけど、2009年の4月から東京に拠点を移し、有限会社ゴーチ・ブラザーズという会社に所属します。そこで、蜷川幸雄さん演出の舞台に関わったり、芸能人が出演する舞台に関わったり、大劇場から、客席数が百人規模の小さい劇場の舞台制作まで幅広く舞台の仕事をしました。

そのような仕事と並行して2013年6月から2015年3月まで、アーツカウンシル東京の調査員となり、東京都で行われている演劇や舞踊、美術、伝統芸能を観て、それらについて報告書を作成しました。この時初めて、アーツカウンシルの業務に関わったことになります。

有限会社ゴーチ・ブラザーズは2014年12月に退職し、翌年3月までは先ほどお話ししたアーツカウンシル東京で調査員をし、4月からは国際交流基金の派遣事業に行かせていただいたりしました。

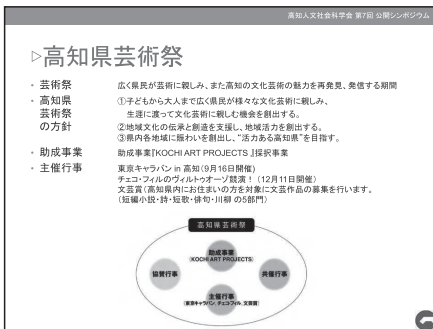
2015年7月、高知県にUターンして、2年間は拠点を高知に置きながら、国内、海外の企画に関わり、2017年5月に、現在の仕事である、高知県文化財団（アーツカウンシル担当）で働き始めました。



スライド3

僕が働いている高知県文化財団、正しくは公益財団法人高知県文化財団という名称で、現在この5つの施設を管理しています。最初に高知県立埋蔵文化財センターが平成3年、1991年の4月にでき、高知県文化財団が管理をするようになりました。

僕が所属している総務部はどの施設にもひも付いておらず、様々な事業を高知県から受託したり、自主財源で助成事業を行ったりしています。



スライド4

そのうちの1つが「高知県芸術祭」という事業になります。これは厳密に言うところ、高知県の予算で実施しており、高知県文化財団が高知県芸術祭の事務局を担っている、というかたちになるので、主催は高知県と高知県文化財団、ということになります。

高知県芸術祭は、広く県民が芸術に親しみ、文化芸術の魅力を再発見、発信する

期間として、毎年9月から12月の時期に高知県で開催されています。

方針としては、この①から③のように、子どもから大人まで広く県民が様々な文化芸術に親しみ、生涯に渡って文化芸術に親しむ機会を創出する。地域文化の伝承と創造を支援し、地域活力を創出する。県内各地域に賑わいを創出し、“活力ある高知県”を目指すという方針のもと、今年度で68回行っています。

僕は2年前から財団に入っているんですが、正直高知県芸術祭というものをまったく知らなくて、財団に入るまで……。ちなみに、この高知県芸術祭、知ってましたという人います？

《会場参加者、拳手》

半々ぐらいですかね。そうなんです。68回もやっているのに、県民にあまり知られてないんですよ。

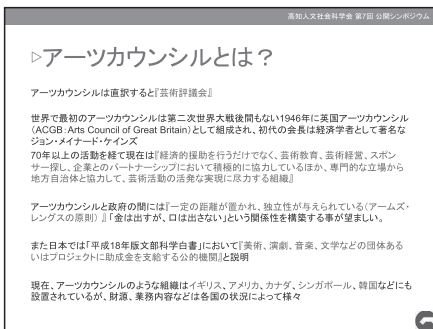
去年からもっと周知させるということで、のぼり旗というんですか、桃太郎旗とも言うと思いますが、維新博のときにもいっぱい作っていた旗を芸術祭もついたり、帯屋町商店街に広告幕を出したりはしてるんですけど、あまり知られてないんですよ。ただ、このままだと、そのうち予算が削られ、芸術祭を開催できなくなるので、何とか周知を強化しないと駄目だな、ということが課題の一つでもあります。

一応、今年度は、僕もメイン事業のほうにいろいろ関わりました、それこそこの「東京キャラバン in 高知」というのは、アーツカウンシル東京が主催でやっているイベントです。東京都がオリンピックに向けて文化芸術を盛り上げるためにやっているイベントの一つで、その高知版を中四国では初めてとなる高知県にて去年の9月に行いました。

「チェコ・フィルのヴィルトゥオーゾ」というのは、チェコ・フィルハーモニーの方のうち、第2弦楽マスターの方とチェロの方をお呼びして、高知県出身のピアノの方を交えてのコンサートを12月11日、高知県立美術館で開催しました。

さらに文芸賞というものを開催してまして、これは、短編小説・詩・短歌・俳句・川柳の5部門に対して、県内から応募を受け、審査員の方による厳選な審査のもと、毎年12月に表彰するという事業をやっています。

主に主催事業としてはこういうことを行い、高知県芸術祭の冊子の中には協賛の事業とか、県民の文化芸術活動を掲載し、芸術祭期間中配布しているので、県内の文化芸術に関する様々な事業を、財団、高知県も協力して宣伝していく、というような活動もあります。



スライド5

次にアーツカウンシル、先ほど山田雄三先生（大阪大学）からもいろいろ説明をしてもらいましたが、アーツカウンシルとは何ぞやというのを僕も簡単に説明しておきます。

アーツカウンシルは、山田先生も仰っていましたが、直訳したら「芸術評議会」という意味になります。まず、日本で今、アーツカウンシルが各地にできてはいるんですけど、名前がちよっと実情に即し

てないので、そこから勘違いを受けやすいという話になっていたり。

先ほどの話もそうなんですけど、最初は「芸術評議会」、それこそ、イギリスが政府とは別に芸術評議会をつくって、ケインズさんとか、いろんな委員が話し合っ、どこに公的資金を投入するべきとか、どんな文化芸術を支援すべきというのを決めるための会議をする組織をアーツカウンシルと呼んでいました。

さらにプログラムディレクターやプログラムオフィサーという実務を担う方がいて、その人達が実際に助成金を受けた文化芸術作品を観て、事業報告書を評議会、このアーツカウンシルに提出し、事業が適正に行われたとか、それが3年、5年経ったときにどういう成果が生まれたのか、まちに対してシビックプライドを醸成したとか、様々な効果を専門的な知識を元に判断します。

なので、日本でアーツカウンシルに近い組織は何かというと、個人的には教育委員会が近いと思っています。国や、県、各自治体に対して、少し距離をとるかたちで教育委員会が設置されており、その下に自治体に雇われた先生がいる。先生らは、生徒に様々な教育を行うけど、基本的な教育方針とか、どういうカリキュラムにするかとか、そういう会議は教育委員会で行う。教育委員会がアーツカウンシルで、先生らがプログラムディレクター、プログラムオフィサーという専門職員だと言える。

この部分は先ほど皆さんも聞いたと思うので割愛しますが、イギリスのアーツカウンシルは、最初、ACGB (Arts Council of Great Britain) という名前で、ジョン・メイナード・ケインズさんが会長をしました。

70年以上の活動を経て現在は「経済的援助を行うだけでなく、芸術教育、芸術経営、スポンサー探し、企業とのパートナーシップにおいて積極的に協力しているほか、専門的な立場から地方自治体と協力して、芸術活動の活発な実現に尽力する組織」と言われています。

今日のテーマでもある「ほどよい距離」というのは「アームズ・レングスの原則」、「金を出すが、口は出さない」という関係性を構築することが望ましいと言われていて、イギリスもいろんな歴史的な観点で見えていくと、財源的にこのアームズ・レングスをしているかと言われたら、なかなか難しいんですね。国からのお金がないとやっぱり動けないところがあるので、70年の歴史の中で、国からのお金とか、そういうところ「金を出すが、口は出さない」という関係性をずっと構築できていたかというところそうではなくて、このアームズ・レングスということすら、アーツカウンシルができてから30年以上経った後に、アーツカウンシルの評価を再定義するときに生まれた言葉と言われてます。

日本では、一番初めにアーツカウンシルという言葉が出てきたのが、平成18年版の「文部科学白書」で「美術、演劇、音楽、文学などの団体あるいはプロジェクトに助成金を支給する公的機関」という説明だったので、日本におけるアーツカウンシルは助成金を支給する組織、お金を渡す組織と解釈されることが多いです。

現在は、アーツカウンシルのような組織がイギリスだけではなく、アメリカ、カナダ、シンガポール、韓国等にもできており、日本も、ジャパンアーツカウンシル、アーツカウンシル東京等、各地にできています。

日本のアーツカウンシルも後ほど説明しますが、なぜ日本がアーツカウンシルをつくったほうがいいという流れになっているかというと、オリンピックが大きく関係しています。基本的に東京オリンピックは、ロンドンオリンピックの成功をお手本に進めようとしています。近年のオリンピックの中ではロンドンオリンピックが文化芸術面において最も成功したという評価を受けて、それを日本の研究者なり、オリンピック関係者とか、スポーツ関係者、文化芸術関係者の人らが調査しに行って、こうこうこういう活動がいろいろあったから日本もそうしましょうという流れがあります。

オリンピックになぜ文化芸術が関係しているかというと、オリンピックにはオリンピック憲章というものがあるんです。そのオリンピック憲章、わかりやすく言うと憲法みたいなもの、その中にオリンピックはスポーツを振興するだけじゃなく、そのときにその国の文化芸術の振興にも力を入れなければならない、ということが明記されているので、オリンピック開催国は必ず前のオリンピック終わりから自国でのオリンピック開催の4年間、文化芸術にも尽力しなければならないのです

なので、日本はオリンピックの開催が決まったことで、文化芸術関係者がそれを盾に予算を増やそうとしたり、地域に対してもっと文化芸術の支援ができるような形を作ろうという機運が高まり、ロンドンオリンピックでの文化芸術面の成功はアーツカウンシル・イングランドがすごい関与して、様々な地域で文化芸術イベントがたくさん開催され、それが文化的なレガシーにもなった、だから日本もアーツカウンシルをたくさん作って、オリンピックに向けて盛り上げていこう、という流れで、アーツカウンシルが作られています。

ただし、危険なのは、オリンピックが終わるとアーツカウンシルそのものが一気になくなる可能性もあります。財源が国や自治体のお金なので、もうお金がなくなったからやめましょうとなったら、いつでも切り捨てれます。そういう意味で言うと高知県は組織でもなく、委託事業としてアーツカウンシルを運営しているのですぐに切り捨てる事ができます(笑) 組織として確立していたらなかなか壊せないんですけどね。

現在、日本国内でアーツカウンシルがいくつかできて、地域の文化芸術活動が盛り上がっているかという、当初オリンピック招致が決まった頃に掲げていた目標には追いついていない状況で、オリンピック関係者も、目標値とかを修正し、盛り上がっている感を何とか出せるような流れをつくらうとしているみたいです。

それはそうですね。ロンドンオリンピックが文化芸術面で成功したのは70年の歴史があるアーツカウンシル・イングランドが積み重ねてきたことが、ロンドンオリンピックでさらに強調されただけの話で、地道にやってきた成果でしかないのです。70年間、様々な紆余曲折を経て、地域のアーツカウンシルがそれぞれ自主性を持って活動した時期もあるし、それを統合して、中央集権的な形にしたりとか、組織としても数が増えたり、減ったりしていたり。現状はアーツカウンシル・イングランドとクリエイティブ・スコットランドというスコットランド地域を担当するアーツカウンシルと、アーツカウンシル・ウェールズ、アーツカウンシル・北アイルランド、合計4つのアーツカウンシルでイギリス全土を見ているので、それがオリンピックのときに機能して文化芸術面での成功に繋がったと言われています。

ロンドンオリンピックに合わせて開催された文化芸術活動の1つに、ピカデリー・サーカスというロンドンの中心部にある広場で「ピカデリー・サーカスでサーカスをする」というダジャレのような企画が本当に開催されました。日本もそれに倣って「歌舞伎町で歌舞伎をする」という企画が1度立ち上がったんですけど、さすがに無理だろう、という話になって、お蔵入りになったようです。海老蔵さんがねえ、本当に襲名して動き出したらわからないんですけど。ただ、ピカデリー・サーカスでサーカスをするということもものすごく難しいし、ロンドン中心部でのイベントになるので、そんなこと無理やろうとイギリスでも言われてました。この企画実現の裏でもアーツカウンシルの関係者

がかなり尽力して、実現できたと聞いています。

日本におけるアーツカウンシルの設置に向けた動向ですが、一番最初にできたのが、2007年7月横浜市が設置した「アーツコミッション・ヨコハマ(ACY)」になります。「アーツコミッション・ヨコハマ」は助成事業も行っているし、文化芸術の振興にも寄与しているので、アーツカウンシルと呼べる組織です。

高知人文社会科学研究 第7号 白紙印刷用	
▷日本におけるアーツカウンシル設置に向けた動向	
・2007年7月	横浜市が「アーツコミッション・ヨコハマ(ACY)」を設置 ※(公財)横浜市芸術文化振興財団内
・2011年4月	独立行政法人日本芸術文化振興協会が 『日本版アーツカウンシル』の仮行務組織の導入
・2012年8月	沖縄県文化振興会がアーツカウンシル業務を開始 ※沖縄県から(公財)沖縄県文化振興会への委託事業として実施
・2012年11月	東京都が「アーツカウンシル東京」を設置 ※(公財)東京都歴史文化財団内
・2013年7月	大阪府・市が大阪府市文化振興会における アーツカウンシル部会の活動を開始
・2015年5月	『文化芸術の振興に関する基本的な方針(第4次)』の閣議決定 「重点施策:日本版アーツカウンシルの本格導入」
・2016年1月	文化庁が「地域版アーツカウンシル」設立のための新規補助事業の募集開始
・2016年4月	5自治体(大府府、静岡県、大分県、新潟市、横浜市)が 『地域版アーツカウンシル』設立のための補助事業の採択を受ける
・2017年4月	上記の5自治体、新規の3自治体(岩手県、岡山県)が 『地域版アーツカウンシル』設立のための補助事業の採択を受ける
・2018年4月	7自治体、新規の3自治体(高知県、宮崎県、浜松市)が 『地域版アーツカウンシル』設立のための補助事業の採択を受ける

### スライド 6

その後、2011年に、ジャパンアーツカウンシルと呼ばれる組織が独立行政法人日本芸術文化振興会内に設置されました。現在は、プログラムオフィサー、プログラムディレクターを雇用し、活動しています。

2012年に沖縄県文化振興会がアーツカウンシル業務を開始。これは構造的なところが高知県と似てて、沖縄県が公益財団法人沖縄県文化振興会に委託事業としてアーツカウンシル業務を行っています。雇用としては、チーフプログラムオフィサーとプログラムオフィサー、合わせて7、8名いるので、体制としては大きいです。委託事業費もかなり大きな額なので、様々な助成事業を展開しており、伝統芸能を支援したり、観光につなげたり、東京に次いで活発にアーツカウンシル事業を展開しています。

2012年11月に東京都が「アーツカウンシル東京」を設置しました。オリンピックも重なり、とても大きなお金が投下され、“Tokyo Tokyo FESTIVAL”とか、多種多様な事業を行っています。先ほど話した「東京キャラバン」もアーツカウンシル東京が中心になって行っている事業になります。

2013年7月には、大阪府と大阪市が一緒に、大阪府市文化振興会議におけるアーツカウンシル部会の活動を開始という流れでつくりました。ここは、組織でもなく、常勤雇用も雇っていないので、日本のアーツカウンシルの中では一番体制が弱いと言われてきます。ただ、ここ数年、いろいろ活動を経て、体制も改善しつつ、活動の成果も出てきているので、今後、どういう形になるか議論をしているところです。

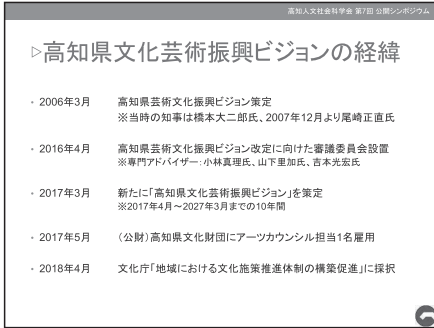
2015年5月に、先ほど岩佐光広先生（高知大学）も仰っていた「文化芸術の振興に関する基本的な方針（第4次）」が閣議決定され、重点施策として、日本版アーツカウンシルの本格導入ということが初めて明文化されました。

2016年1月、それを受けて文化庁が「地域版アーツカウンシル」設立のための新規補助事業「地域における文化施策推進体制の構築促進事業」の募集を開始しました。

初年度である2016年に採択されたのは、大阪府、静岡県、大分県、新潟市、横浜市の5拠点でした。2年目に、岩手県、岡山県が採択を受けました。3年目の2018年4月から高知県、宮崎県、浜松市が入って、このタイミングで高知県もこの補助金を受けているので、アーツカウンシルを設置するために本格的に動き出したということになります。

ただ、高知県は少し複雑な流れがあって、僕が財団で働き始めたのは2017年なんです。県の担当者に「こういう補助金があるので高知県も出さないんですか」と聞いたら、「高知県も出しました」と。当時の文化振興課の担当者が2017年度の採択を目指して申請したけど、不採択だったようで。後日、その申請書類を見せてもらい、担当者と改めて補助金の申請資料をつくって、2018年度に採択されました。

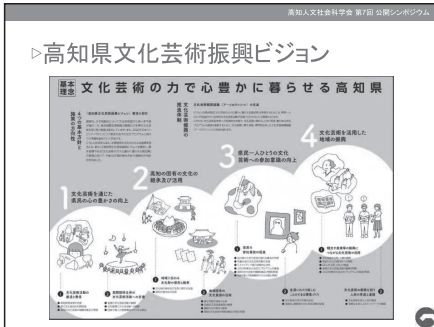




スライド7

に「芸術文化」を逆にした「高知県文化芸術振興ビジョン」が策定されました。これによって2017年4月から2027年の3月までの10年間、高知県はこの文化芸術振興ビジョンの方針を踏まえて文化芸術振興を行う事になります。

そのビジョンに、アーツカウンシルの文言が入ったこともあり、2017年5月から僕がアーツカウンシル担当として雇用されています。その後、2018年4月に、さきほど話した文化庁の「地域における文化施策推進体制の構築促進」に採択されています。



スライド8

続いて高知県文化芸術振興ビジョンの経緯を話します。2006年3月に高知県も振興ビジョンを策定しました。

高知県のビジョンは10年一区切りで策定されているので、2016年より東大の小林真理さん、京都造形芸術大学の山下里加さん、ニッセイ基礎研究所の吉本光宏さんという有識者の方を専門アドバイザーとしてお招きし、1年間、定期的に審議委員会にて議論を重ね、2017年3月

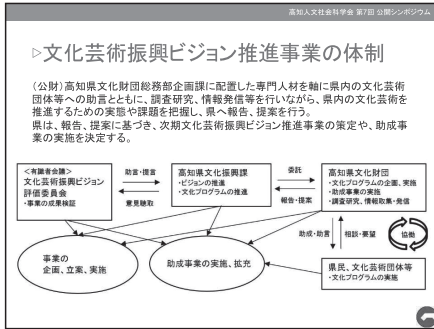
これが高知県文化芸術振興ビジョンの見開き版なんですけど、これ、県庁の文化振興課に言えばもらえます。この見開き版と冊子版と2つあります。

これが冊子で、この中にどういう流れでビジョンをつくったとか、より詳しく県民の文化芸術に対する意識調査とか、様々な情報をまとめて冊子にしているのと、簡易版として見開きで概要を説明したものがああります。ネットでもデータを

ダウンロードできるので、興味がある方はぜひ読んでみてください。

高知県文化芸術振興ビジョン推進事業の体制としては、このような形で進めています。

正確に説明すると、高知県文化財団総務部企画課に配置した専門人材を軸に県内の文化芸術団体等への助言とともに、調査研究、情報発信等を行いながら、県内の文化芸術を推進するための実態や課題を把握し、県へ報告、提案を行う。県は、それを受けて、次期の文化芸術振興ビジョン推進事業の策定や助成事業の実施を決定する、という感じ



スライド9



スライド10

です。

こういう体制を僕から県に提案して、文化庁にも高知県からの申請書類として提出しているので、県も納得したうえで進めてるんですけど、実態としてはまだうまくいっていない感じはしています。僕や財団として県に提案を行うんですけど、その提案を県の担当者がうまく咀嚼して実施するようなどころまでは至っていません。

高知県文化財団のアーツカウンシル事業として僕が主にやっている事業としては、①から④番になります。

まずは、文化芸術支援として、多くの人が集まる場での文化芸術団体、個人の発表の場の創出を行っています。3月頭に開催された「土佐のおきゃく」とかもそうですけど「夏のお城まつり」とか、そういう人が集まるイベントに文化芸術団体や個人をコーディネートして、県民

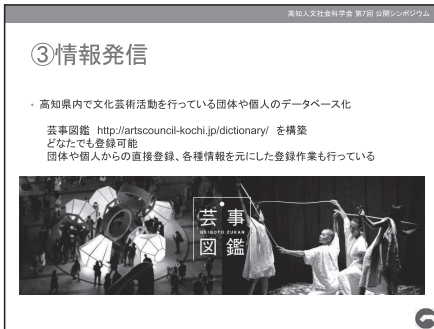
が文化芸術に親しめる場をいろいろつくりましょうっていう事を行っています。

ただ、そもそも県の担当者からは、県内の演劇とか、ダンスをしている人達に、発表の場をもっとつくってあげたらみんな喜ぶだろうということで「夏のお城まつり」とか「豊稗祭」とか、既にお客さんがたくさんいるところ、しかもステージもあるような場所に僕らが交渉して、演劇やダンスが披露できればお互いに助かるのでは、という提案だったんです。

しかし実際は、演劇とか、ダンスとかをステージで発表するには、稽古する時間も必要だし、準備費用もかかるし、そんなに簡単にできないと思いますよ、という話をしたんですけど、そこらへんはなかなかうまく通じず、しかも一団体にかけられる予算が15,000円ぐらいで、その費用では演劇やダンスはとても無理だと思ひ、クラフト作家のような方にワークショップを開催してもらったり、高知県立美術館の開館記念日にクラフトマーケット&ワークショップを開催してもらったりしています。

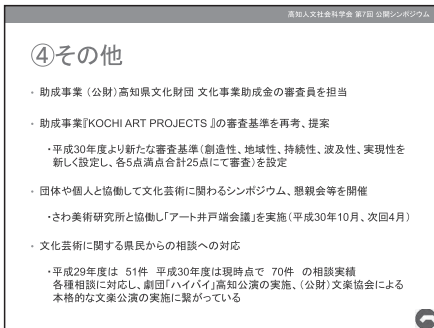


スライド11



スライド12

からやめましょう、それよりも県内の文化芸術団体、個人のデータベースをつくりませんか？と逆提案し、高知県内の様々な文化芸術団体、個人をどんどん登録しています。



スライド13

あと、人材育成としては、「アートマネジメント講座」を実施しています。今年度は、加藤種男さんという、アサヒ・アート・フェスティバルを立ち上げ、地域の草の根的な活動を推進してきた人を講師にお招きし、地域とアートについて話してもらいました。その他にも県内の文化芸術団体、個人の方に講師をお願いしたり、僕が講師として講座を開催したりしています。

次は情報発信についてですが、最初の打ち合わせで県の担当者から提案されたのは、文化芸術を盛り上げるために文化芸術のイベントが一覧で見れるようなホームページをつくってはどうか？という感じだったのですが、色々とりサーチをした結果、高知県はテレビ局のホームページに文化芸術のイベントが掲載されてるんですよ。同じような内容のホームページを新しく立ち上げても意味がない

その他として紹介しますが、ここがアーツカウンシルとしては最も重要な事業が盛り込まれていますね。助成事業としては僕が関わっているものが2つあるので、その審査基準を再考したり、新しい審査方法を提案したりしています。実際「KOCHI ART PROJECTS」の審査基準は今年度より新しい基準で審査するようになりました。

あと、専門職員は現在僕一人なので、

県内の文化芸術団体や個人と協働しているいろいろやっつかないといけないと手が回らないこともあって、さわ美術研究所というアート系の方々が集まっている団体があるんですけど、そこと協働して「アート井戸端会議」というものを実施しています。今回はまた4月にやる予定です。

そして現在最も重要だと考えて実施しているのが、この相談対応です。財源もないんですけど、僕が話を聞いてアドバイスをしたり、資金をどうつくとか、他地域や何なら海外の文化芸術団体や個人につなぐとか、申請書の書き方に関しても僕に相談してもらえたら、テクニックやノウハウを伝えることもできます。地味な仕事ですが、アーツカウンシル高知として予算もかけずに確実に成果を出せる事業だと考えています。

来週行われる安田町の文楽公演も安田町の担当さんから相談を受け、大阪の文楽協会と安田町の間でつなぎ役としてやり取りし、興行が成立した経緯があるので、少しずつ成果を積み重ねていければと思っています。

高知人文社会科専攻 第7回 公開シンポジウム

### ▷助成事業「文化事業助成金」

- ・高知県内又は県外で行われる音楽、演劇、映像、美術、古典芸能、民俗芸能、文学等に関するものとし、企画性、創造性が高く、また人材育成やネットワーク形成につながるなど、高知県の文化芸術の発展、保存に寄与すると認められるもの。
- ・対象事業の期間：年度内（4月～翌年3月）
- ・助成金額：最大50万円（対象経費の3分の2以内）／団体・個人
- ・毎年1月募集開始、2月末締め切り、3月採択団体発表

<平成30年度採択事業>

- ・有澤一郎顕彰コンサート
- ・第4回ジョン万次郎英語弁論大会
- ・古民家再生を通じた土佐の伝統建築文化の体験と継承
- ・地域住民による高知の近現代資料保存の取り組み
- ・半月の神話（二十三夜ノ月・Half moon Myth）



スライド14

高知人文社会科専攻 第7回 公開シンポジウム

### ▷助成事業「KOCHI ART PROJECTS」

- ・地域住民が主体となって取り組む創造的な文化芸術活動で、その地域の自然や歴史、歴史、文化など地域資源を活かし、新たな地域貢献や地域の活性化に資する企画内容であるもの。
- ・対象事業の期間：高知県芸術祭開催期間中（例年9月～12月）
- ・助成金額：30万円／団体・個人
- ・毎年5月募集開始、6月締め切り、7月採択団体発表



スライド15

高知県の助成金について少し説明します。「文化事業助成金」は財団の運用益で賄っている助成事業です。助成金額は最大50万円で、毎年5～6団体を採択しています。

今年度だと「有澤一郎顕彰コンサート」、「ジョン万次郎英語弁論大会」、「古民家再生を通じた土佐の伝統建築文化の体験と継承」、「地域住民による（高知の近現代資料保存の）取り組み」、「半月の神話」は大月町で開催されたアニメを活用した事業で、デンマークからアニメーションのプロを招聘し、子どもたちと一緒にアニメ制作、朗読劇等を行いました。その費用の一部を財団の助成事業でサポートしています。

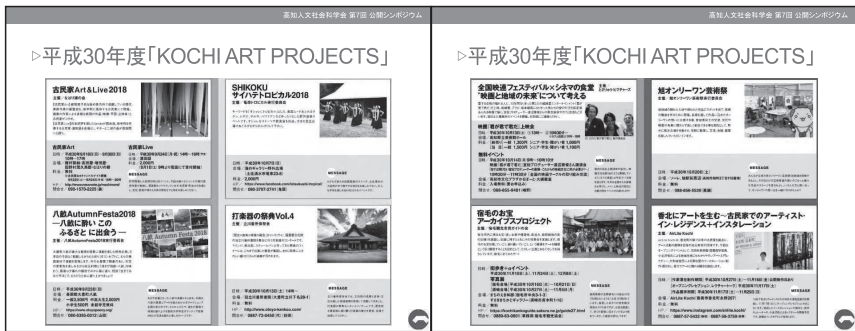
もう1つが「KOCHI ART PROJECTS」という助成事業で、これは先ほど話した高知県芸術祭の主催事業の1つという位置づけで、財源は高知県からの委託事業

費になります。審査は県が委嘱した執行委員が行います。助成金額は最大30万円で、団体・個人問わず、毎年5月に公募し、6月に審査をしています。

この助成事業は高知県芸術祭の期間中に開催される事業、という縛りと「地域×アート」というコンセプトでやっているのですが、地域の文化資源を活用するとか、地域に根ざして活動しているの方々を中心にする事業などが採択される助成事業となっています。

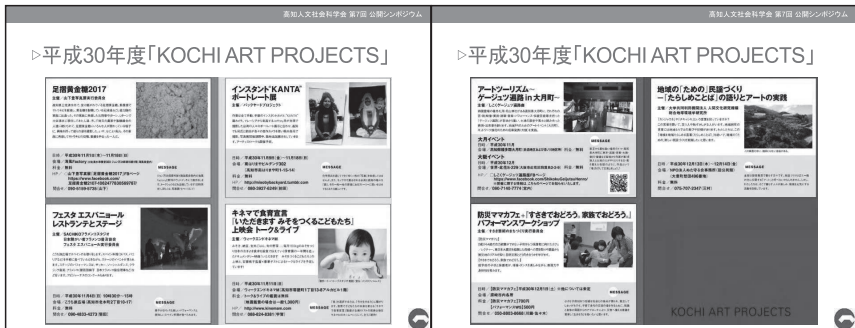
今年度の事業としてはこういうものがあります。配っているプリントにも書いてあるので詳しくは、また後ほど見てもらえたらと思いますし、ホームページなどにも載っていますのでぜひご覧ください。

「香北にアートを生む」という事業は、様々なメディアで取り上げてもらいました。高知新聞にも4回ぐらい掲載していただき、地域に対して何かしら影響を与えているように感じます。来年度は、海外在住のアーティストを香北に招聘し、滞在制作をしながら、地域交流等をやりたいと言っているのですが、今後の展開にも期待しています。



スライド16

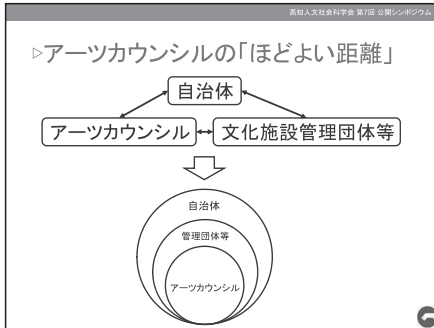
スライド17



スライド18

スライド19

このアートツーリズムという事業は大月町で活動してる、大月町をフィールドワークにしてる方々が集まって、大月にてイベントをし、同じようなイベントを大阪でも開催し、大月の活動紹介を含め、色々と広がり期待できるような展開になっています。今後、県内で開催されているこういうアートイベントをつなげて高知県としてプッシュしていくような流れをつくれなかなと財団の理事長とも相談をしているところです。

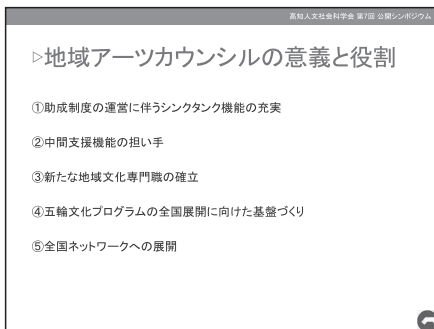


スライド20

アーツカウンシルの「ほどよい距離」というのが、本日のタイトルでもあるんですが、理想はアーツカウンシルと自治体、文化施設管理団体等、これは文化芸術団体とか、個人でも県民でも何に変えてもらってもいいんですけど、こういう距離感が望ましいと思うのですが、現状、高知県や、全国にあるアーツカウンシルも、図に示す状況に近いのではないかな、と感じています。資金的にも、アーツカ

ウンシル東京ですら、ほぼ東京都のお金で動いているので。今後、ファンドをつくる話もあるらしいのですが、現状は自治体のお金でアーツカウンシルは運営されています。

さらに高知県文化財団は先ほど話した5施設を管理しているんですが、本来なら管理が適切に行われているか評価をする立場でもあるアーツカウンシルが同じ財団内部にあるので、この点だけでも構造的に破綻していると言えます。また財源的にも高知県の委託事業費で運営しているので、アームズ・レングスは一切とれず、高知県が「お金もう出しません」と言うときアーツカウンシルはあっさりなくなってしまうのが現状です。



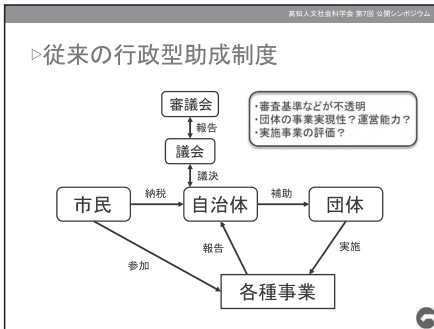
スライド21

地域アーツカウンシルの意義と役割については、ニッセイ基礎研究所の吉本さんがこういうことを定義しています。

「助成制度の運営に伴うシンクタンク機能の充実」、「中間支援機能の担い手」、「新たな地域文化専門職の確立」、「五輪文化プログラムの全国展開に向けた基盤づくり」、「全国ネットワークへの展開」となっています。オリンピックに関しては日本独特ですね。

アーツカウンシルは端的に言うと中間支援組織と覚えてもらったらわかりやすいかもしれませんが。行政と県民や文化芸術団体の間に立って、中間でどちらにも支援する。県民や、文化芸術団体に対して支援するだけではなく、行政サイドにも県民の要望とかをまとめて提案していく。そういう両方向に対しての中間支援組織と言えます。

地域文化専門職の確立はそのとおりなので、僕が高知県に雇用されているということで、高知に文化芸術の専門職が現状生まれています。ただ確立までできていないので、今後どうやって確立していくか？という課題はあります。



スライド22

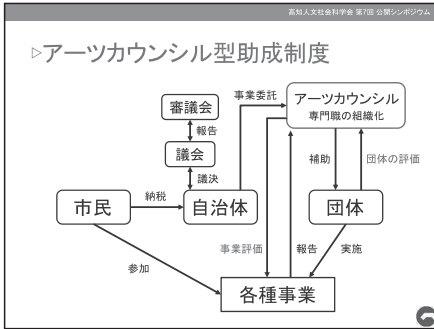
アーツカウンシルのメリットを説明しますと、これまでも補助金という制度はあったわけで、県民の方が税金を払って、自治体が団体に補助する。その補助するときに「こういう補助金を出しますけどいいですか」って議会に提案し、議決し、その上に審議会のような組織があり、報告し、承認される。団体は補助を活用しながら事業を実施し、広く県民が参加できるようにして、事業が終了したら報告

する。このような流れでこれまで補助してきました。

このやり方だと、審査基準が不透明な場合が多く、例えば、あの団体は採択されたが、私の団体は不採択だった、どういう理由で不採択になったのか説明して欲しい、という要求に自治体職員では丁寧に説明できない事があるわけです。本来であれば、団体の事業実現性や、運営能力を把握すべきですが「まあ、あの人がやったら大丈夫だろう」とか、先ほど山田先生が話したように、あの地域の議員さんが、あの団体いいって言うてるから補助してあげよう、みたいな流れで補助が決まる事もあり、より一層怪しい感じになります。

最終的には実施事業がどうだったか。財源は県民が納税した税金なので、その事業を行ったことで何かしら県民に還元されないといけない、実際その補助を使ってどのような成果が出たかという報告は自治体職員が見て判断できるのか？という疑問も出てきます。

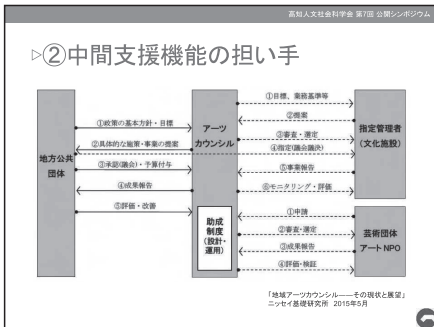
それに対して、アーツカウンシル型の助成制度というのは、こういう流れになります。県民が納税するところは同じですけど、「KOCHI ART PROJECTS」のような形だと、自治体から事業委託という形で予算がアーツカウンシル高知に渡され、専門職員が審査



スライド23

基準をつくり、審査を行って、採択団体を決める。団体は事業を実施し、アーツカウンシル高知に報告する。専門職員は事業だけの評価ではなく、団体としての評価も行い、それらの資料を次回の審査でも活用できるように蓄積していくことで、シンクタンク機能ができ、より正確な審査が可能になると考えています。

アーツカウンシルの専門職員は事業結果だけでなく、準備期間、広報宣伝のやり方などについても併走しながら確認するので、今回は事業実施することができたが、今後の広がり、団体としての将来展望、新たな資金獲得、将来性がない、などの理由で次の助成にはふさわしくないかもしれません、という話を自治体に報告する事も可能です。



スライド24

中間支援組織が担うべき機能というのは、本来はこの図が理想的と言われています。地方公共団体、アーツカウンシル、指定管理者、さらに芸術団体があり、先ほど話したように文化政策基本方針の目標などを地方公共団体とアーツカウンシルで協議しながら、より良いものをつくっていくイメージです。

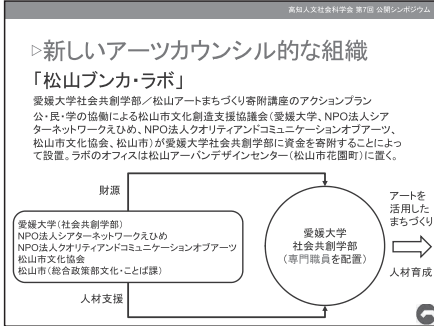
指定管理者への委託金も財源は税金なので、例えば、県立美術館の運営が適正

なのかという評価も、本来はアーツカウンシルがリサーチし、評価をして、地方公共団体に報告したり、助成をする芸術団体やアートNPOについても評価し、報告する立場が理想です。

ただ、さきほど言ったように、高知県文化財団もそうなんですけど、アーツカウンシルと指定管理を担っているのが同じ組織になるので、例えば、僕が県立美術館の事業評価をするというのは、できると言えばできますが、その評価をどれほど信用してもらえるのか、正直同じ組織なので、甘く評価してるのでは？と言われてたりすると思います。逆に僕がものすごく悪い評価を出したら、多分、美術館の館長から「お前、何て評価をす

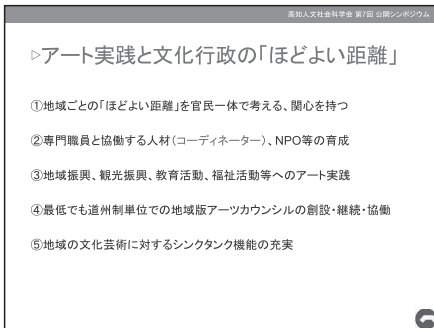


るんや!」って怒られると思うので、そういう意味でもうまくいかない気がします。今、日本のアーツカウンシルのほとんどが文化財団的な組織の中でできているので、この部分が本当に難しいと思います。だから「ほどよい距離」が一番取れないのは、こゝです。



スライド25

ていないんですよ。大学の寄附講座を活用して、愛媛大学、シアターネットワークえひめなどのNPO法人、文化協会、松山市が出資して、寄附講座をつくる。その寄附講座がそれらの財源を基にアートを活用したまちづくりをする、というミッションを掲げ、専門職員を雇用しています。助成事業は行っていないが、今後資金が増えれば、まちづくりに関係した事業に助成を行ったりする可能性があります。このスキームで広く松山市民に文化芸術を振興することとはできるし、財源が偏っていないことによって、松山市だけの意見が進めることができない。そういう意味でこれまでの日本にはない、新しいかたちのアーツカウンシル的な組織ができたので、ここが今後どうなっていくか、



スライド26

最新の事例を紹介します。松山市に新しいアーツカウンシル的な組織ができました。この形はアーツカウンシルとして、色々な意味で「ほどよい距離」を取りながら運営できるんじゃないかなと、理想と言えるかまだわかりませんが、今後どういう展開になるか、期待をしているところです。

「松山ポンカ・ラボ」と言いますが、この組織の最も良いところは財源が偏っ

業界としては注目しています。

最後に今日のシンポジウムテーマ「ほどよい距離感」について話すと、ほどよい距離とか、アームズ・レングスという話になると、お金の話になると思うんですけど、お金、アーツカウンシルの財源に関しては、アームズ・レングスはほぼ取れていないので、幻想に近い状態です。特に現在の日本で財源を自治体以外のお金100%でつくるのは無理なので、健全

にするために、さきほどの「松山ブンカ・ラボ」みたいに様々な財源を持ってくるとか、国とか、自治体のお金で半分ぐらいカバーして、後は他のところからお金を入れるという流れが良いと思うんですけど、高知県はそうになっていないし、予算が捻出できませんでした、と言われたらアーツカウンシルがなくなってしまう。

ただ、このような事は高知だけでなく、地域ごとにいろんな問題があるので、お金にしても、体制にしても、地域ごとの「ほどよい距離」をこれからどうつくるか。それに對してやっぱり官民一体で考えて、つくっていかないと。

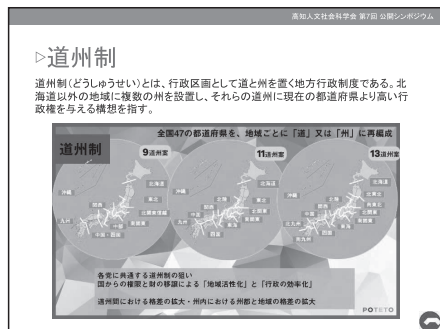
行政の方は、県民や議員さんの意見に対してすごく敏感だと思います。ただ、意見がないと、今やっている事がうまくいっているという解釈になってしまう。例えば、文化振興ビジョンつくる際に県民から意見を求めたいとホームページに案内が出た時に、その案内もあまり知られてないのが問題なのですが、意見が少ないと、現状の案で問題ない、と判断してしまう。だから高知県芸術祭というものを今日来られた方の半分が知らない、将来的になくなったとしても、県民の半分ぐらいは知らないし、反応もしないと思うんですよ。県がどういう事に税金を使っているか、という事も県民みんなが関心を持って考えないといけないし、そのためにもアーツカウンシル担当として県民とより近い距離感で接していかないといけないなと思っています。

さらにアーツカウンシルと協働していく人材やNPO等も含めた文化芸術団体の育成。今の高知県の財源も国の財源もそうなんですけど、オリンピックが終わると文化芸術の予算は絶対増えない。財源そのものがどんどん減っていくので、世の中の流れ的にも福祉とか、教育とかが優先されていく。専門職員をもう1人、もう2人とか増員するのは難しいと思うので、県内の様々な文化芸術団体や、人材を育て、活かし、アーツカウンシルと一緒に地域の課題に取り組める人たちが増えていくことが一番望ましいと考えています。

今後は地域振興、観光振興、教育活動、福祉活動に対して文化芸術を活用する事が増えてくるとしています。文化芸術の持つ機能をうまく活用する流れができれば、そっちの財源を活用して、アートと地域、観光、教育、福祉とか、それぞれの距離感をうまく保ってお互いにプラスになる状態を目指す。文化芸術振興の予算は下がっても、観光の予算で文化芸術振興に寄与する活動を行うとか、そういうことを今後考える必要もあると思っています。

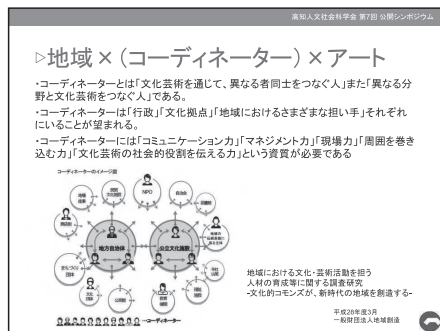
日本ではアーツカウンシルが増えているんですけど、全県に1つできる、というのは難しい。せめて道州制単位ぐらいでアーツカウンシルができればいいのでは？と考えています。

最後の行は先ほど言った助成事業をすることで、文化芸術団体等の情報を蓄積し、シンクタンク機能が充実していけば良いとも思っています。



スライド27

予算を配分しましょう、みたいな動きが。その時に各地域に最低1つずつアーツカウンシルがあり、それらがネットワークを組んで文化芸術振興を考える、という事ができるというのでは？と思っています。



スライド28

コーディネーターがそれぞれ存在すれば、各々が協働することで、行政も含めて様々に距離感を取ることが可能になると思います。そういう意味で僕自身もこのコーディネーターの一人、公的機関の一職員として存在している。こういうコーディネーターをどんどん増やして、うまく作用していけば、地域に対しての文化芸術振興とか、他分野へも能力を発揮していけるのではないかと考えています。

コーディネーターについては、今日配布した参考資料の中に載せているURLからより詳しい資料が見れるので、興味があればぜひ一度読んでみてください。

先ほど言った道州制についての参考資料です。一時期、道州制を導入したらいんじゃないかという議論があったんですが、反対意見も多く、現時点では非現実的な話です。しかし、今後も地方分権や、地域にもっと主体性を持たせる、という意見が強くなれば、もしかすると機能を区切って、道州制を検討する可能性はあるかもしれません。例えば、文化芸術だけは、この9道州制案ぐらいで国の

先ほどのスライドで育成する人材をコーディネーターと表記していたのですが、それについての補足説明です。この資料は地域創造の冊子から抜粋しており、コーディネーターとは「文化芸術を通じて、異なる者同士をつなぐ人」また「異なる分野と文化芸術をつなぐ人」と定義してあります。

「行政」「文化拠点」「地域におけるさまざまな担い手」、こういうところにコー

残り時間が少なくなってきましたが、今日は「ほどよい距離」をテーマに、高知県文化財団のこれまでの取り組みと、今後の課題等についてお話しさせていただきました。オリンピックが終われば、文化芸術の財源はどんどんなくなっていくと思います。ただ、そのような状況で何ができるか、みたいなことを考えていくし、文化芸術の機能を観光振興とか、そういう他分野でも能力を発揮していけばいろんな財源は持ってこれるし、アーツカウンシルと地域の方々一緒になって、活動していけたらなと思っています。

あと、最後の補足です。文化は英語ではカルチャー（culture）と表記するのですが、語源的には、耕す（cult）という意味になります。農業はアグリカルチャー（Agriculture）、土（Agri）を耕す（Culture）、養殖業は、アクアカルチャー（Aquaculture）、水（Aqua）を耕す（Culture）と書きます。

カルチャー（Culture）、文化には何の接頭語もないんですけど、僕はその部分にヒト（Human）とか、心（Heart）が入ると思っています。文化芸術がなくなると人の心はささむし、人自体が耕されなくなると、社会はどんどん衰退していくと思うので、文化芸術を振興し、より豊かな心や人間を耕していきましょう、そういう流れを今後つくっていけたらなと思っています。

（さいとう つとむ 公益財団法人高知県文化財団 アーツカウンシル担当）